

マハバーラタ：行為とその結末

—— ビシマとカルナ ——

照 井 悦 幸

序

ヒンドゥー叙事詩、マハバーラタは、世界の最も価値ある文学作品のひとつに数えられている。この叙事詩は、10万以上にのぼる句で編まれ、イデオットとオデッセイをひとつにして、その約7倍の長さになる。マハバーラタ(Mahabharata)という語は、大きい、重大などという意味を示す'Maha'とバハタス(Bahatas)での戦いという意味を指し示す'baharata'との合成語である。基本的にはこの叙事詩は、バハタスでの大きな戦いを描くものである(Futter: 1973)。この編纂は、紀元前2世紀から紀元後2世紀の約400年をかけて行なわれたと言われる。それはインドカレンダーによれば、3102 B.C, カリーヨガの時代であり、約1400 B.Cだと推測され、そのころすでにこの物語は伝説化して存在していたのだという。当時のインド社会は部族社会であり、大小数々の部族が勢力のある家によって支配されていた。その支配する家の主が王として君臨したのである。そして、部族どうしの争いは絶え間なくあった(Van Nooten: 1973)。

インドのヤムナ川上流ハスティナプラに古くから首都を構える一つの支配的な家、クラワ。そして一方、そこからおよそ60マイル程離れたインドプラシャに新しく進出したパンダワ。この両家は従兄どうしである。マハバーラタの物語は、地域内での覇権をめぐるパンダワを陥れようとするクラワの企みから、親族内の亀裂闘争を描くものである。しかし、それは単なる戦争物語なのではなく、双方の兵士としての振舞いが、その社会的な価値観(倫理的な原理、すなわちクシャトリとしての義務)の背景に描き

だされる文化的英雄達の行為を描いたものである。つまりこの物語は、そのインド的な価値観においての個々の内面的葛藤を見せつけるものであり、その文化の多くの教訓と哲学を供給するものなのである。

まさに豊かな深さと幅をもつこのマハバーラタは、特にヒンドゥー哲学の二つの代表的な思想である、カルマ(KARMA)とサマサーラ(SAMASARA)¹⁾が反映されているといわれる。膨大な物語の一側面ではあろうが、本稿ではその思想の摂理について、特に二つの登場人物ビシマ、カルナを通じて明解に暗示されていることを示しながら考察する。また関連して、諸悪の根源としての女性といった思想が同時に読み取れることについても言及したい。このマハバーラタの物語における哲学的背景を考察することが本稿のねらいである。

マハバーラタはサンスクリット語で書かれた5,000 ページにもわたる叙事詩である。本稿では、そのオリジナルな精神と趣を保ちつつ、読めるかたちにしたウィリアム・バック(William Buck: 1973)の英訳版をテキストにしている。尚、このテキストからの本文中での引用は、(Buck: ページ)のように記載した。

(1)

人の現在の存在は人の行為の直接的な結果であり、(カルマ)、過去の生活での善悪が蓄積され、輪廻する魂に付着する。カルマは、ある者から他へ継続されていき、現在の人生の行為に対してその善を削減したりまた、つけ加えたりして影響を及ぼす。しかしそれは、決して全部は尽きることはない。過去の目に見えなかった行為の表立った目に見える兆候である。過去の悪意は将来の再誕生である(O'Flaherty: 1976, 14)。



(MAHABHRATA, Buck, 1973)

図 1

〈ビシマ〉

他界した王、マハビシアは天国において宇宙創造の神ブラフマンによる創造の謎についての講義に退屈してよそ見をしていた。そのうち、彼は美しい川の女神ガンガの裸体を向こう岸に見つけ、その姿に欲情を抱いてしまっていたのだった。彼女と視線があったとき彼は発汗していたが、それは天の国ではありうることでなく、まさに生まれ変わりを余儀なくされる寸前であった。天の冠をはずしたマハビシアは、ガンガに微笑みをかけた瞬間、取り囲んでいたジンジャーとジャスミンの花々が翳み、しだいに灰色になってゆくのを見た。再びこの世への生まれ変わりであった。それは、苦難に満ちた人間界の存在として再びこの世に生きることであり、それはその魂が、死と生の繰り返す苦しみのチェーンに拘束されることを意味するのである。

その頃、クラワの王パラティアは、子供に恵

まれないまま王女とともに森の奥へ隠居生活に入っていた。ところが、性的欲情にて墮落し地上に落とされたマハビシアの魂が王女の体内に宿り、その魂はパラティアの子、サンタヌとなって生まれ変わったのである。

女神ガンヌは、それを知ってサンタヌ王（マハビシンの魂）の妻になるために地上に降りるのであるが、彼女はその結婚の条件として、サンタヌに対して彼女のすることを決して問いたださないようにと約束させるのであった。結婚後ガンヌは7人の赤ん坊を次々とガンジス川に投げ捨てた。8人目の赤ん坊を投げ捨てようとしたときに、サンタヌはその小さな赤ん坊への愛おしさに負けて、ガンヌを引き止めにかかった。ついにガンヌは、サンタヌがその子を連れて帰ることを許すのであるが、彼女はサンタヌのもとから去って行くのであった。助けられたその子は、ビシマと名づけられた。

親族間の殺し合い、すなわち人類の種の終わりを暗示させる血族同志の争いをその意志とは反して作り上げてしまうビシマには、その因果の連続を遡る“はじまり”の説明がなされるのである。人類の創造といった部分のまさに神話的事柄はやはり、終わりを導くビシマの因果のなかにあらねばならなかったものであろう。

ビシマの誕生を遡ってゆくと、マハビシャ王のあの世での、ガンガに対する欲情から始まったものであった。直接的な原因は、この世でのサンタヌ王の赤ん坊への愛着がもとでガンガとの約束を破ることになり、ビシマを生かしたのである。サンタヌ王は、マハビシャの生まれ変わりである。これもまた、因果応報がもたらした結果なのであろうか。過去における行為が、それぞれの今の人生に影響をもたらす。それはひとりの人生を越えた年月である。ポプキンスは、以下のように述べている。

誕生その物が、カルマによる影響なのである。そして人は、過去の生における、さまざまなカルマ的影響の蓄積とともに生まれ、そしてまた生まれ続けるのである（1971：80）。

ヒンドゥー神とのかかわりのなかで人の生を捉えるこの物語にあって、因果関係のスケールは、人間界から神の世界までに遡る。この世と神の世に明確な一線が引かれる思想とは異なり人間と神の生きる世界が区界のない上下の直線で結ばれるのは、輪廻という考え方にに基づき、ビシマ誕生に明確に物語られているのである。

クラワの王パラテアの子、サンタヌ王、そしてこの王の子として生まれたビシマは、明らかに王位を継承する者である。しかし彼は、「この血統をより強くするため」と、その地位を父サンタヌのもう一人の妻、彼とは義理の母であるジャタヤヴァティの子、ヴィシトラヴィアに与えてしまうのであった。

そして、ビシマはヴィシトラヴィアの妻として、バナラスという王のもとからアンバ、アン

ビカ、アンバリカを奪い取って来た。

しかし、ヴィシトラヴィアは一人の子供も持てずして死去するのであった。

ビシマはジャタヤヴァティのもう一人の子ヴィアサを死んだヴィシトラヴィアの妻たちと結ばさせ、その子供に王位の継承を企てた。

アンバにはすでに決まった結婚相手がいたために、父親のもとに連れ返したが、「ビシマの捕虜などいない」とアンバの父は彼女の引き戻しを拒絶した。ヴィアサとアンビカ、アンバリカの姉妹のあいだにダリタラシュタ、パンドゥが生まれた。そして下女とのあいだにヴィドラが生まれた。

長男のダリタラシュタは盲目であった。そこでビシマは、パンドゥに王位を継承させた。

パンドゥ王は、クンティと結婚し、また、ビシマはサルヤ王の妹マドリをパンドゥの妃としてもらってきたのであった。そこで、マドリを第二夫人とした。

パンドゥは、平安な日々を送っていたが、ある日、交尾中の一方の鹿を射止めてしまう。のこされたもう一方の鹿はこれを咎め、パンドゥが次に性交したならば死ぬという呪いをかけるのだった。パンドゥは、都を離れて二人の妻とともにヒマラヤの奥地に隠遁した。

パンドゥが去ったあと、ビシマは盲目のダリタラシュタを王とさせた。

ビシマは、ダリタラシュタの妃として、ガンダハラ王の妹ガンダハリをもらい受けて来るのであった。

妊娠したガンダハリであったが、その後丸一年たっても生まれる気配がなかったところ、100人の息子たちを一度に身ごもっていることがわかった。やがてガンダハリは、100個の固い白玉を産み落とした。それを壺にいれ、さらに1年経ったところでまず最初の子、ダヨダーナが生まれ、そして残りの子が次々と生まれた。

一方、子供がいないことに気落ちし続けるパンドゥを見かねた妻クンティは、かつてまだ若い娘であったころ、隠遁者ドゥラサスから教えてもらった魔法のマントラのことをパンドゥに話した。それは、そのマントラを使えば、天国

ことになる。時々の社会の儀式を着実に踏まえ、その社会の人々同様に、社会が伝統的に作り上げたそれぞれの役割に生きて行くことが人生である。それに止まることをせず、新たな可能性を求めることは、すなわち社会への反逆者となることなのである。

カルマ思想を世俗的なレベルまで引き下げて考えるのは見当違いなのかもしれないが、そういった伝統社会に生きた人々、あるいはカルマ的な世界に生きる人々は、ただ自己の与えられた義務に従って功德を稼いでゆくことで、自ずと幸福といったようなものが与えられる時を待つという見方を取る。ビジマが作り出した混乱は、彼が運命付けられた己れの人生に反逆したことに始まるのである。己れが課せられた、生まれもつての義務を彼の自由意志で放棄しようと出た行為によって引き起こされていったのである。

なぜビジマは、自分自身で王位を受け継がないのか。当然の王位継承順に従っていればそれはビジマなのであり、もとより悲劇的な結末への進展はなかったものではないか。物語の中でビジマは、長老として、また師(Guru)として、彼の甥たちより高い尊敬を受ける人物である。

行為と結末の関係は、幾重にも連なっている。一つの行為が必ずしも結末をみないまま次の行為が為されている。ある行為が一つの結末を生み出すというよりも、行為が行為を引きだしたりもする。そこに“善悪の蓄積”が起こるというのである。

このストーリーにおけるビジマの行為の顛末をみると、彼の「この血統をより強くするため」と“志した行為”は、ヴィントラヴィアが一人の子も持てずして死去した時すでに、成り立たないものとなっていたはずである。アンビカ、アンバリカをヴィアサに娶らせる行為は、王位の責任をヴィアサへ転嫁し、またその妻として娘姉妹をバナス王から掠奪したという2つの行為と合わせて、ヴィントラヴィアの死という結末に終わったものを、さらに受て、(あるいは情をはって)“処置的な行為”として引き出されたも

のと考えられる。それともヴィアサに特別な意味合いがあったのであろうか(註2)。そして以後この行為がその子達の因果な展開を導き、クラワとパンドゥの対立と決戦へと流れることになる。

志は、善であった。しかし、その実行に正しさを欠き、結末は思うところとならなかった。次にあった行為は、それへの情に未だ駆られてなした処置であって、当初の志とはかけ離れたものとなっているのだ。

人の行為の直接的結果と定義されるカルマ、その因果関係で展開されるこのマハバーラタにあって、この行為と結果の関連が必ずしもすべて同質の法則で相関していないことがわかる。行為がもたらすその結末の在り方には、「行為—結末」という一つの因果のうえで、様々なかたちやスケールがあろうが、表面上同じ行為にもかわらず、人の置かれた立場によってそれが導く結末が異なることがある。すなわち、行為そのものには結末を決定させ得る絶対的な価値基準はなく、その人物が行為を下す外部環境にその解釈を委ねて結末が導き出されるかたちとなるのである。あたかも法の量刑を定めるように、行為が状況解釈を受けるのである。しかしまた、結局のところその状況だとて、蓄積された善悪のカルマによって運命付けられたものなのである。

王位継承者の第一の地位にあったビジマが行った行為は個人の人生の顛末を越えてこの部族全体に及ぶ。しかし一方で、このような宿命的な生まれではない人々には、ひとつの恋愛、ひとつの主張、あるいは辞退も、あくまでもその個人の人生の枠を越えはしない。そこには一つの同じ人間の同じ行為でありながら、立場や環境によって結末の重大さに大きな違いがあることを認めざるをえないものがある。人間それぞれが、そもそも根本的に同等な立場にないという認識がなされるのである。それは、ヒンドゥー的な、生まれによって決まる人間観につながるものがあるのかもしれない。

ビジマの母ガンヌは、この結末を知っていた

に違いなかった。サンタヌ王にその子をおいたとき彼女は「この子を生かしておくべきではないのに」(Buck: 12)と言い残して、王の前から去ったのであった。

はじまりが、“創造”(Creation)というものであるとすれば、人間の因果のその根源に、性的な事柄にかかわることが語られることは、多くの意味合いを持つことなのかもしれない。

(2)

この物語において、カルマの思想が反映されるということに加えて、際立った出来事には必ず女性関わっていることに気が付く。ファン・ヌーテンは以下のように述べる。

多くのマハバーラタの解説者、とくにインド人は、この物語の筋において女性の存在が重大な位置を占めると考えている。たとえば、ある女性が侮辱される。それに対して復讐をするといったように (1971: 48)。

しかしながら、そのことは女性に対する尊重であるだけでは理解しにくい。それは元来、女性はすべてのごたごたの根源であるといったように見なされるからである。このマハバーラタにおいては、まさに女性の復讐が、悲劇的な戦いを導いたとも解釈がたつのである。もう一度、ファン・ヌーテンの引用である。

ただ唯一クラワが、結婚した身分のある女性に許されない、無礼を施したとき、パンダワは、血の戦いだけがこの罪に報いさせる方法であることを確信したときであった (1971: 47)。

クラワ、ダヨダーナとのダイスゲームで負け続けるパンダワの長男ユディストラは、ついに自分達の妻ドロウパディを賭けてしまう。それに勝利を得たダヨダーナは、弟ダハササナを女性の控え室に送る。彼は、ドロウパディに手をだそうとするのであった。その場は、クリシナの出現で事なきを得るが、最高神ヴィシヌの生まれ変わりクリシナは、ダヨダーナ率いるクラワ

にパンダワとの戦争回避のため最後のメッセージを伝えに来たとき、襲いかかろうとするダハササナに向かってこう言うのである。「ドロウパディに無礼をはたらいて以来、おまえの命もここまでだ。」(Buck: 148)。瞬間クリシナの手に雷のごとくナイフが光り回転したのを見たのがダハササナの最期であった。そしてクラワ、パンドゥの戦いは始まってゆくのである。

ところでオフラリテーは、マハバーラタに表現されたヒンドゥー思想の男女の性的な関わりが発生について以下のように紹介している。

マハバーラタによれば、人は元来死への恐れなしに生きていた。また、その時人は性的交わりを知らなかった。トリタ時代、人はイマジネーションによって生まれていた。しかしドゥッバラ時代、性の交わりが生まれ、カリ時代には夫婦ができた。そしてその時、死が生まれたのである (1976: 27)。

性的交わりのおこりは、情欲の発生に結び付けられる。欲情を抱いたまま、ヒンドゥーの最終ゴールである‘魂の解放’(Moksa)には、決して到達はできない。他界していたマハビシアが、ガンガへの情欲のため天国から追放された話が語られていた。そして、その情欲が最終的には破壊に向う争いを招いたのである。また、オフラリテーは以下のように述べている。

性的な交わりによる創造は罪の典型であるという示唆は、悪魔に対するヒンドゥー神話の中には繰り返しあらわれてくる。女性たちは、ただ単に多くの悪の抽象的な原因であるというのではなく、賢人や妖怪を墮落させるための神々の具体的な方法に使われたりもする。これは、インドの古代からの伝統やウパニシャッド教典などの一般的な女性嫌いの発想の自然な結果である。人の再生産の行為がこの世の存在の苦しみの鎖につなぎ続ける罫にはめることになる (1976: 27)。

マハビシア王の性的な欲情での天の国追放の話に続いて、パンドゥ王もまた、性的な交わりが彼を死に追いやっている。パンドゥは、性交中に彼によって殺された鹿によって、性的行為を

持てば死ぬという呪いをかけられ、王位を捨てて隠遁生活を送ることになったのであった。そして妻クンティのマントラで5人の息子を得たのち、その呪いの記憶も薄れ結局、愛欲の神に誘われる性交によって死すのである。マハビシア王の地上への墜落もパンドゥ王の退位そして死も、マハバーラタの戦いへ導く展開に重大な要因となっているのである。

このようにマハバーラタは、ヒンドゥー哲学のカルマ、サマサーラの思想をつよく反映して展開しているのであるが、これらの思想は女性との関連、情欲といったものとのつながりで多く表現されているのだ。カルマ的なものもたらす人の行為の背後に、男性は女性に誘惑されているのである。これは、一方で生命の創造者であるにもかかわらず女性へ抱くもう一つの側面、悪の源泉としての女性というヒンドゥー思想のひとつの現われなのであろう。

マハバーラタの物語は、ここにもまた前章でスポットをあてたビシマの最期に、明確に伏線を引いて、この女性の力とカルマとの関連についての考え方を暗示していると思われる。長老ビシマは、唯一彼を殺害するために男として生まれ変わった女性ドロパディ王の子スィカンディによって死するのである。

〈ビシマとアンバ〉

ドロパディ王は子供を授けられる前に、夢でシバ神から息子が生まれると知らされる。ところが生まれてみれば、その子スィカンディは女性であった。しかしドロパディは、シバ神のことばを忠実にとらえ、何らかの運命にあるはずだと世には男が生まれたと伝え、戦士として育ててゆくのである。

このスィカンディは、ヴィシトラヴィアの妻として、かつてビシマが誘拐してきた三姉妹の一人アンバの生まれ変わりである。すでに夫として決まった相手がいるということで、家に戻された長女アンバであったが、父サルワは彼女を拒絶した。恋人も親も失い復讐に燃えるアンバは、隠遁者の力でシバ神に会う。そしてビシマを殺害するために、命を捨てて、このスィカ

ンディとなって生まれ変わってきたのであった。

バハラタの戦いが始まって二日目、ガンジス川沿いの平原においてパンダワの三男アルジュナの馬車に飛び乗ったスィカンディは、ビシマに向かって突き進み数百本の矢を射った。ビシマは、その矢の方向に視線を向けることすらせずに、その矢に体じゅうを覆われた。そのまま崩れるように馬車から落ちてゆくビシマであったが、突きささった矢が支えとなって地面に伏すこともできなかった。ビシマの遠い昔の女性に対する行為の顛末であった。

〈カルナとそして母クンティ〉

武術の師ドロナは、彼の弟子達のこれまでの成果を王をはじめとする人々に披露する会を催し、ライバルであるクラワとパンダワは、双方に別れてそれぞれの腕を競いあっていた。そこに現われたのが、カルナである。「黄金のライオン」(Buck: 28)のようにアリーナに登場したカルナは、耳には黄金のイヤリング、そして胸には太陽の輪が描きだされた、生まれながらに身につけていた鎧に身を固めていた。「太陽のように壮麗で、月のようにハンサム」(28)な彼は、ドロナに微かに頭を傾けて一礼すると、アルジュナがやってみせたことを自分もやってみせようと言った。彼は黄金の椰子の木のように穏やかな息使いのまま、それを容易くやり済ましたのであった。

ところがアーチェリーの指導者クリパは、カルナに歩み寄って彼の名と父、母、どの王家なのかを名のように言った。カルナの顔色が変わった。そこにクラワのダヨダーナが割って入った。カルナの武術を並みはずれた力量だとみたダヨダーナは、カルナに身分と領地を与えたのだった。一方で、パンダワの次男ビーマは軽蔑的に笑ってダヨダーナに呼び掛けた。「馬車の御者の子を王にして、いったい何の真似だ。カルナのそんな武器なぞ置かせて馬車の鞍で働かせたらどうだ。」(Buck: 28)

パンダワが、クラワとのダイスゲームに負け

て、13年間の都からの追放から戻ったとき、ダヨダーナは盲目の王、父ダリタラシュタに、次の王位はだれが継承するのかと聞き寄った。その時、彼はこう言うのであった。「カルナがこちら側についている。もはやパンダワなど恐れることはない。」(Buck: 31) カルナという優れた武力なしでは、クラワ側の長男ダヨダーナは、武勇者ぞろいのパンダワに対して戦いを挑むことはできなかった。カルナがクラワサイドに付いたとき初めて、この従兄どうしのふたつのグループは戦いへの道を歩むことになってしまったのである。それでは、このカルナとはいったい誰なのか。

戦いの回避に働くクリシナが、ある夜カルナに会ってこう言うのである、「カルナ、パンダワは兄弟達だ。クンティはおまえの母なのだ。おまえは5人の兄弟たちの長男でありそれを彼らが知れば、必ずおまえの言葉に従うであろう。」(Buck: 149)。神性な武術をもったカルナが、馬車の御者の子としての身分であったのは理由があった。カルナは、ガンジス川の土手で拾われた捨て子だった。そしてそれは、パンダワ兄弟の母クンティが、若き頃、ガンジス川に流した子であったのだ。

クンティは、クラワ家の南のクンティ王家の王女であった。訪れる様々な人々に厚いもてなしを施していたクンティは、ある時、彼女の親切に対するお礼だとしてドゥルサスという隠遁者から魔法のマントラを教えてもらうのだった。それは、このマントラを使えば天国のどんな神をも呼び出すことができ、交わり、その子を宿することができるというものであった。本当にそんなことが可能なのだろうか。彼女は試しにそのマントラを唱えたのであった。そして、太陽の神、サルヤが姿を現したのであった。「日の神よ、許してください。ただ、私の新しいマントラを試してみたただけなのです。」(Buck: 17)。サルヤに対してクンティは許しを請う。サルヤは、彼女を許すのであったが無邪気な赤ん坊は生まれた。若いクンティには子供を育てる準備はできていなかった。そして彼女はその子を籠に入れてガンジス川に流したの

だ。その子が、カルナであった。

捨て子とされたカルナは、神性無敵な武術をもちながらも何の身分を持ちえることもなかった。それが、ダヨダーナとの出会いによって地位を獲得し、結果的に母を同じくするパンダワ兄弟と敵対するクラワ側にたつという、その後のカルナが避けることができない運命の流れを創ったのであった。さらにそれが、バハラタのこの大戦争への、決定的なきっかけともなっていたのである。カルナの後の行為と必然的な結末への鎖は、やはりその誕生に端を発するのである。

ほんの気粉に生命を創り、そして自分の勝手にその命を操るなどという行為。カルマの法は、このクンティの行為を見逃すわけはなかったであろう。その結末は悲惨である。その同じマントラでクンティは、その後、パンダワの5兄弟の生命をもたらしことになったのである。

カルナは、自分が敵対するもの達と血のつながりがあったことを知っても、それとの死をかけた戦いを止めようとはしなかった。クリシナの、この真実を知ればパンダワはカルナに従うという言葉に應えて、カルナはこういった。「私は不要とされた子であった。それを必要と認めたのはダヨダーナだった。——宇宙の神シヴァの生まれ変わりクリシナよ。どうか誰にもこのことは言わないでくれ。ビジマは、すべての法(Dharma)の輪を回したのである。——クシャトリアの法。」

カルナはダヨダーナへの忠誠心、クシャトリアとしての倫理的義務において、クリシナのその言葉を断ったのである。捨て子カルナは結果として、クラワとパンダワとの戦いを導く鍵となる者となっていたのであった。そしてその因果関係を顧みるとき、やはりその彼の生まれた時点をさらに遡った、母クンティの行為にたどりつくのである。マハバーラタが見せつけたクンティの行為に対する結末とは、身内どうしの殺しあいであった。同じ祖先を持つものたちの殺戮である。それは、人類の破滅へと向う戦いなのであった。

(3)

ほとんどどんな古典文学のなかにも、マハラティ・カルナほど練達した技術で、人間特性の洞察という視点で描かれている登場人物はいない。そしてまた、いまだ、正しく理解されていない。——物語のなかでたいへん豊かで、明解に彼の人生の詳細について描かれているにもかかわらず多くは、実際には誤解され続けているキャラクターなのである（スカサンター：1957, 49）。

〈カルナ〉

ファンヌーテンによれば、マハバーラタでは、登場人物の特徴について明からさまに表現することはめったにないのだというのであるが、カルナの行動については例外的に詳しいということになる。しかも、他の多くのキャラクターが神性の側面が強調されるのに対して、カルナの場合、人間のレベルにおいて、その性格が描写されるのである。

スカサンカーによるカルナ解釈もまた心理学的に行なわれている。彼はカルナを“Frustration complex”だとして性格づける。彼によれば、カルナの行為は、幼児期と生まれた環境から被った精神的外傷に支配されているのだと指摘する。カルナの忠誠心、寛容さ、そして過剰な自信は「異常な精神的の明らかな例である」と述べている。そしてスカサンカー以下のように続ける。

超自我とのぶつかり合いのなか、やはりエゴも無敵のまま残っているわけには行かない。人はエゴを非常に膨大化させることができるが無限ではない。どんな者にも限界がある。ある限界を越えるまで膨張したエゴは、爆発せざるをえないのだ（1957：52）。

それがすなわち、ダヨダーナを通じて社会的地位を獲得して以来、エゴを膨ら増し続けたカルナなのである。

登場人物の行動にたいする解釈、または評価は、評価するものの主観的価値に影響されるが、なるべく客観的になされようとするひとつの試みがあったとすれば、心理学的な分析を通じて

できるのであろう。しかし、マハバーラタはほとんど多くの場合、キャラクターらの行動は心理学的影響によっては、引き起こされないものである。それぞれの行為はその以前の行為によって引き起こされる。それは、回避できない行為の鎖の連続的な流れなのである。

すべての登場人物は、それぞれに個性を持った別々の個人なのであるが、マハバーラタでは、それら一つ一つの個は、目に見えない力でつながれており、その力がかれらの動きを決定付けるのである。

〈ワヤンとジャワ人そしてカルナ〉

ジャワの影絵人形芝居、ワヤンの多くは、マハバーラタの物語をもとにしている。ファン・ニースによれば、

ジャワ人のこの物語の概念は、150 からそれ以上のワヤンの物語から発展してきたのだ。新しい話を織り混ぜることやさまざまな細かな点を創り変えることで行われてきたのであるが、それはすべてジャワ人のコンセプトにあわせてできたものである（1980：26）。

このマハバーラタのジャワ化は、特に‘アラス’と‘カサール’の考え方に基づけられる。ギアツは、この概念を以下のように説明する。

アラスは、純粹、精練、などを意味する。存在することの究極的な構造を感情的に理解しているかぎり、自己の魂と特性はアラスなのである。同様に複雑な宮廷のエチケットに沿った繊細な態度で自己の行動を規制できる限り、その人の行為もアラスである。カサールは、その反対のことである。無礼、粗雑、野蛮（1960：232）。

ワヤンの中の一つ一つの人形は、その姿かたちにあラス性とカサール性を象徴させている。ブランドンは、「小さくて、華奢な体、狭い足幅がアラス」（1970：41）と述べている。また、彼は極端にあラス性が表現されているのが、カルナとパンダワ家長男ユディシュトラ王であるという。外面の肉体的特性が必ずしも内的な倫理的な性格とは合致しないものの、カルナのアラス性

はジャワ人には認められたものである。アンダーソンも又、この点を以下のように説明する。

——物語の最初の段階で、カルナがまだ高貴なクシャトリア出身であることが知られないとき、カルナは、アーチェリーコンテストに現れ、ほとんどその勝利を手中に納めようとした。このとき、バンドゥ側が出てきてカルナにストップをかける。——ジャワ人の聴衆は疑いなくこの行為に邪魔されたという意識を抱く。しかし彼らがそう感じるのは、高慢な態度でカルナを扱ったからだといった俗っぽいことが理由ではなく、カルナが取っていた態度のすべてが本物のクシャトリアの行動であり、それを中断されたことに邪魔が入ったと感じられるのである（1965：8）。

ところで、カルナというキャラクターは、アルスだと認められる一方で、カルナが属した側は、それには適合しない、カサルである。クラワ側なのであった。この矛盾は、カルナの特性を示す大切な点であろう。

物語の中であって、たとえカルナは大変なアルス的なヒーローであっても、彼がおかれた状況が、決して彼をして完璧な倫理を実践はさせないのである。なぜなら、一方で自身の兄弟たちと戦いを求めることに非難される。しかし、それを彼がやめたとき今度は彼に地位と名誉を与えた、ダヨダーナに対して忠誠を欠くことになり、やはりまた批判を受けることになる。このような状況下であって、いかにしてもカルナは、倫理的価値の何かを欠落させねばならない立場に運命づけられているのである。

それゆえ、カルナは、“状況の犠牲者”なのである。アンダーソンは、インタビューによってジャワ人のカルナに対する視点を以下のように紹介している。

ジャワ人のカルナに対する態度は、かつて年長の役人が彼の友人のことについて話してくれたときのことがいきいきとよみがえる。その役人の友人は改革が起きていたころ、オランダ側として戦った。そして独立を宣言したあとの無政府状態であった数日に、若い国家主義者に家族を殺されたことが長く苦しみとなっている。

この友人は、オランダからの扱いは悪くはなかった。

その年配のジャワ人の役人は、強い愛国者であった。しかし、彼がこのかつての学友について語るとき、ほとんど無意識にアデバティ・カルナとこの友人を比較しているのである。彼はこの友人もまた、間違った側で戦ったのだ。しかし、その友人にとって、その行為には、十分な理由があったのだ。そして友人は、勇気と名誉をもって戦ったのである（1965：16）。

言うまでもなく、インドネシアはオランダによって植民地支配を受けていた。支配者への従順で真面目な役人が正当であったことは、オランダ支配が終わった瞬間に、インドネシアへの不当な裏切り者であったという立場に置かれるのである。

そのものの側が正しいか誤りか、それは時と場合による、目には見えない人の力を越えたものに決定される。ヒンドゥー哲学に従えば、人の状況は、カルマ的連続の結果だと捉えられる。しかしまた、ジャワ人のセンスでは、人の目に見えない力への依存は、この世の物事はすべて相対的であるのだというもう一つの視点に導くことになる。

アンダーソン（1965）によれば、かつてよりジャワ人を観察してきた多くの人々は‘ジャワのシンクレティズム’とか‘ジャワ的相対主義’という言い方でジャワ人の特性を表現してきたのだという。そして以下のように結んでいる。

インドネシアの国家革命がおきて以来“寛容”という言い方が、ジャワ人本質的な特質として言われるようになった。寛容的であることが伝統的な彼らの倫理観であったのかはべつとして、彼らもその広い心、寛容的であるという評判に誇りを持っていることは明確である（1965：1）。

東南アジアでは一般的に、すべての現象は二つの相対するペア、たとえば、男に対しての女、天に対して地、右と左などによって規則的に統制されているという考え方がある。そしてこれらはまた、男なしには女もまたないように、相互の補足的なものである（Complemental Opposition）。この視点に立った時、絶対的なひとつは存在しえないものとなるのである。

結局マハバーラタの話は、正義と真実の名においてカルナの命を奪うことになる。どこにその真実は属していたのか。物語の中では、それは言うまでもなく明白であった。クリシナあるところに、いつも正義があった。正義や真実についての判断は、世俗的なかわりにその魂を結びつけられる人間たちに許されたものではないのである。だから人は、ただ生まれ持って授かったその義務をひたすら果たせばよいのである。そして、その後の顛末は、カルマの法のみぞ知るわけである。

註

1. サマサーラ(samsara)輪廻、転生の思想が、人間存在をひとつの生からまた次への生への永続的な流れの中にあるといった視点を導く。苦しみ(ドゥカ)にあふれるこの世に、生の連続の鎖につながれていることになる。これよりの魂の解放が(モクシャ)最終的なゴールとなる。
- 2, 3. 本稿のテーマにおいて直接扱うことはなかったが、マハバーラタの物語の展開の中で重要な位置をしめる、ヴィアサの誕生とその母、シャタヤパティについての話をここに付け加えておく。シャタヤパティシャデイ国王のウバリシアが狩りを死にも利に出かけ、休憩をしたときうとうとと眠りに陥ってしまう。そのとき、彼は美しい女性が彼を待っている夢を見た、目が覚めると王は、彼の生命の種が彼から離れて、葉の上に落ちているのに気がついた。王は、その種を女王までに持って行くようタカに命じた。タカは、空に飛び立って行ったが途中で別のタカが獲得を加えていると誤解して、攻撃を加えてきた。生命の種は、ヤムナム川に落ちて流れた。それをメスの魚が飲み込むと、サンタヌ王国に入ったところで魚夫に捕まるのであった。魚夫がその魚を切り開くと、女の赤ん坊が中からうまれてきたのだった。その子

は、シャタヤヴァティと名づけられた。シャタヤヴァティは美しく成長したが、魚の匂いが抜けることはなかったので、しばらく一人でいた。あるとき吟遊詩人パラシアーラが、彼女に告白し、あたりを魔法の歌で霧に包み、愛しあった。すると、シャタヤパティの匂いは消えた。そして、このとき二人の子としてうまれたのが、ヴィアサである。パラシアーラは、彼を森に連れてもどり、シャタヤパティは父のもとへ帰った(Buck: 12~13)。

参 考 文 献

- 1) Anderson, Benedicat R. 1965. *Mythology and the Tolerance of the Javanese*. Ithaca, N.T: Southeast Asia program, Department of Far Eastern Studies, Cornell University Press.
- 2) Brandon, J.R. 1970. *On Throne of Gold: Three Javanese Shadow Plays*. Harvard: Harvard University Press.
- 3) Buck, William. 1973. *Mahabharata*. Berkeley: University of California Press.
- 4) Futtere, Nico. 1973. *The Contest Ethic in The Javanese Shadow Play*. Berkeley: California.
- 5) Geertz, Clifford. 1960. *The Religion of Java*. Chicago: University Chicago Press.
- 6) Hopkins, Thomas J. 1971. *The Hindu Religious Tradition*. California: Dickerson Publishing Company.
- 7) O'Flaherty, Wendy. 1976. *The Origins of Evil in Hindu Mythology*. Berkeley: University of California Press.
- 8) Van Nees, Edward. 1980. *Javanese Wayang Kulit: an Introduction*. Kualumpur: Oxford University Press.
- 9) Van Nooten, Barond. 1971. *The Mahabharata*. N.Y. Twayne Publishers. Inc.
- 10) Sukthankar, Vishu Sitaram. 1953. *On the Meaning of the Mahabharata*. Bombay: